

本と人の縁 偶然と必然

理工学研究科教授 有賀 義明



20代、30代の頃は、人と人の縁というものを考えることがなかったが、最近は、“偶然ではなく必然”というような表現を耳にして“なるほど”と思うようになり、人と人の縁というものを感じるようになってきた。人と人の縁は、人生で重要な要素と実感するが、本と人の縁も大切な要素であると感じる。

昔から古本屋めぐりが好きで、初めて神田の神保町に行ったのは、中学3年生の時だった。母の実家が日本橋小伝馬町にあり、その頃、祖母が住んでいたのが夏休みに泊まりがけで出かけて行った時のことを良く覚えている。神保町には、古本屋だけでなく、三省堂や書泉もあり、のんびりブラブラしながら、ぶらり途中下車的な、本との予期せぬ出会いを楽しむには良い場所である。大学生になってからは、教科書や参考書を安く買おうと良く出かけたが、その当時、“温室効果”というような題目の本が古本屋の店頭でうず高く積まれていた光景を思い出す。地球温暖化という言葉は、今では誰でも知っているが、今から40年近くも前に、地球温暖化を先見的に論じていた本（人）があったことを思い出す。そして、その光景を思い出すたびに、地球環境や自然災害を考える時は、人間の目先の時間スケールではなく、地球の歴史的な時間スケールで物事を考えることが大切であると感じる。

本が眼に飛び込んで来る、タイトルの活字が眼に飛び込んで来るというような現象は、マン・ツウ・ブック（人対本）だからこそ起こる現象のように思われる。本との出会いを楽しむためには、目で見て分かること、肉眼で見られることが大事である。本屋や図書館などでの人と本の対面が大切であり、目で見て・手に取って・本をパラパラッとめくるところに本と人の巡り合いが待っている。電子媒体は、存在が既知の本の保存には優れているが、存在を知らない本との巡り合いには縁が薄いように思われる。

ところで、好きな本のジャンルは、空想科学小説とドキュメンタリーである。その理由は、空想科学小説に関しては“人が想像できるものは実現できる”（ジュール・ヴェルヌ、仏国の小説家）という点であり、ドキュメンタリーに関しては“事実は小説よりも奇なり”（バイロン、英国の詩人）という点である。これまでに会った本の中で、様々な事項を考えさせられた本としては、『抗命ーインパールⅡ』（高木俊朗著、文春文庫）や『天才の通信簿』（ゲルハルト・

プラウゼ著、講談社文庫）がある。『抗命—インパールⅡ』は、昭和19年のビルマ（現在のミャンマー）で行われた、インパール作戦での史実を扱ったものであり、将兵の生命を第一と考えて行動した師団長に焦点を当てた本である。有事・平時を問わず、人道的な行動、歴史の審判に耐える判断等の大切さを考えさせてくれる本である。『天才の通信簿』は、アインシュタインやエジソンなど、歴史的な天才や偉人の小・中・高校時代の成績が記述されている本である。小さい時から優秀な学業成績を残したケース、小さい時は落ちこぼれ状態だったケースなど、様々なケースが紹介されている。得意なところや良いところを見付け、それらを伸ばすことが大切ではないかと考えさせてくれる本である。

（ありが よしあき）



有賀先生がご紹介された、ゲルハルト・プラウゼ著『天才の通信簿』を本館で所蔵しています。

所 在：本館旧書庫5層

請求記号：372||P89

図 書 ID：90026641

古本市でのめぐりあい

人文学部准教授 飯 考行



東京にいた頃、大学最寄りの駅ビルで月初めに古本市が開かれていた。帰りがけに気が向くと立ち寄り、半ば暇つぶしに数百円の本を買い求め、電車内で揺られながら目を通した。学部卒業後、同じ大学の大学院に進学したため、その古本市とのつきあいも次第に長くなった。

気がつくと、いつの間にか、古風な随筆が部屋にたまっていた。読みやすく値段が手ごろだったためであろうか。こうした本は、たいてい売り場の片隅にまとめて置かれている。ややくせあせた外箱の並ぶ一角で足をとめ、見ず知らずの書き手の本を手にとって頁をめくり、日記など事実の羅列にとどまるもの、受け狙いのものや、教訓を連ねているものは、元の場所に戻す。あてどないお眼鏡にかなう基準は、その人の言葉で自然に綴られていることで、時を同じくして前衛的な音楽を聴いていたものの、文章の嗜好はなぜか保守的な方向に傾いていった。

何とはなしに気に入ったのは、石川欣一の著作である。初めに『ひとむかし』を手にし、内

容は、自身の何気ない生活、回想に過ぎなかったが、軽妙洒脱で惹かれるものがあった。『可愛い山』は、山へのそこはかたない思いを綴り、新書版も出ている。数々の翻訳を手がけ、従軍し、東京ライオンズクラブ初代会長だったことは、後に知った。河上徹太郎は、評論はもとより、中原中也、青山二郎や小林秀雄などの友人を記した文章や、日常を綴った随筆選『自然のなかの私』が絶品である。河上と親交した吉田健一は、独特の長い文体で知られるが、戦後間もない『乞食王子』などの随筆は簡明で清しい。詩人の室生犀星、小説家の色川武大（阿佐田哲也）、実業家の菅原通濟、東北ではフォークシンガーの三上寛、友川かずきのいわば本職外の文章も、意外に魅力的である。初期の岡部伊都子、獅子文六、小沼丹ほか、有名無名の書き手の随筆で、お気に入りのものは数知れない。専攻する法学を離れて、就寝までのつかの間、そうした文章を気の向くままに読み返すことが、現在のささやかな心の安らぎになっている。

以上、個人的な本との出会いを記してきた。最近では、インターネットでお目当ての本を購入することが多く、やや味気ないが、時間のあるとき、ふと弘前大学や市内の図書館、書店をさまようと、いまだに思いがけない出会いが待っている。生活の渦のなかに、いつの間にやら意にかなう本が引き込まれ、やがて立ち現れて、ともに親しく歩みを進めている思いがする。

(いい たかゆき)



飯先生がご紹介された石川欣一や河上徹太郎、室生犀星が書かれた図書を本館で所蔵しています。

例えば…

河上徹太郎著『河上徹太郎全集 第1巻』

所 在：本館旧書庫3層

請求記号：918.6||Ka94||1

図 書 ID：90435357 他